市長賞

『前向き』の正体

進藤　ティナ

新型コロナウイルスという言葉を耳にするようになってからというもの、いろいろな事柄が思い通りにいかなくなったり、当たり前が当たり前で無くなったりと、私達の生活様式や考え方は変化したように思う。

例えば、飲食店で勤務していた方は休業要請で収入が減った、或いは失業した方もいるかもしれない。「手洗い・うがいをしていれば安心」が神話になり始めた、といった具合だ。

この状況に加え、私は個人的に「前向きに生きる」という事が、ますます難しくなって来たと感じている。そこで『前向き』の正体について、私なりに探ってみた。

まず始めに、就職活動に苦戦した経験、または営業職の経験がある方なら、こんな場面に遭遇した事が、お有りではないだろうか？

企業を訪問した際、一通りお互いの質疑応答などが終わり、帰り際「前向きに検討させて頂きます。」という台詞が相手から飛び出す場合がある。私も、まだ社会人歴が浅かった頃、この一言にかなり期待してしまっ

た時代があった。そして、この決め台詞が飛び出した相手先からは、殆ど断りの返答が後日届いた。まだ、未熟だった私は、とてもショックを受けてしまった記憶がある。これも社交辞令だと気付くまで、しばし時を要し、『前向き』の一言にトラウマに近いものを抱いた。しかしその後、関西に本社が有る某企業様と商談を行った際、

「うちとしては、是非お宅の会社と取引をお願いしたいと思っとります。色好い返事をお待ちしております。」と言われた時に、心が軽くなり『前向き』へのトラウマに近いものから、卒業できたような気がした。

『前向き』という単語で期待を持たせておきながら、ばっさり切るという戦法は、ちょっと苦手だ。一歩間違えば『前向き』の悪用になりかねない。『前向き』という本来、プラスの印象を与えるはずの単語が、その場をやり過ごす為に乱用されたり、言い訳の道具に成り下がってしまうのは何とも勿体ない。

先日、プライベートで受けた、あまり気が進まないお誘いに対し、悪戯心を起こし「後ろ向きに検討しておきます。」と答えてみたら相手が笑って引き下がった。引き下がってくれた事は嬉しかったが、『前向き』へのトラウマに近いものへ、今更、仕返しを目論んだ自分に気付き、一人になってから思わず苦笑した。

「前向きに生きる」へ話を戻そう。日本では戦争が半世紀以上起きていない。しかし世界では日々、様々な国や地域で戦争や紛争が起きている。銃弾の音に怯えながら生活している地域の人々に「前向きに生きる」という概念は果たして存在しているだろうか？　その日・その瞬間を文字通り、必死で生き抜いている人々にとって、この概念はしっくり来ないとしても不思議は無い。

日本は、殆ど移民を受け入れていない為、ほぼ単一民族で成り立つ珍しい国家だ。ましてや江戸時代などは鎖国により、他国との交流が乏しかった。もし多民族国家ならば、知らない文化や自分とは肌の色が異なる人とも調和を図らねばならない。前方を目指しつつも、横や後ろにも目を配りながら、国民は国の発展に寄与し

て来たであろう。人種・民族間の軋轢や衝突も無数に生じた事と想像できる。対立する民族へ道を譲るべき時には、前を向いたまま後退して時を待つ。はたまた、戦いに負けた時は、後ろ向きのまま降参し、いつの日か我が民族が再度前進できる将来を切望、といったドラマがあったであろう。

日本は前さえ向いていれば何とか歩んで来られたような部分が、これまではあったかもしれない。言い方は汚いが、俗に言う島国根性だ。しかし、世界経済が激動期を迎え、ウイルスという見えない敵と抗う令和という時代を生き抜く為には、「前向きに生きる」という概念に、多少の軌道修正を加えてみても良いのかもしれない。

二〇一一年に発生した東日本大震災後、「がんばろう◆◆」や「前を向こう」といった類のスローガンが、日本各地のあらゆる場所で掲げられた。一部の被災者の方々にとり、この「がんばろう」が精神的な負担になるか否かが、物議を醸した。

私事ながら、宮城県内に居住していた私の祖父は、この大震災で災害関連死を遂げた。僭越ながら意見を述べさせて頂くならば「がんばろう」は避けた方が無難だと思った。

これ以上、がんばれないかもしれない人に対し「がんばって」や「前向きに〜」と言うのは、言葉の暴力に成り得ると私は思う。

『前向きでもいいし、後ろ向きでもいい。それは、朝起きたら自分で決めればいい。』

「がんばってもいいし、がんばらなくてもいい。」

例えば、こんな風に考えて生きられたら、今よりは少し楽に生きられないだろうか？

つまり、『前向き』や「がんばる」が過度のプレッシャーとならないよう注意する事が重要だと、私は思う。

本来、プラスの要素を持つ言葉たちが、人の心を蝕む魔物へ化けてしまわぬように。

令和に入ってから、芸能界における自死が急増している。人から見られ注目される芸能界のお仕事というのは、常に笑顔でいなければとか、いつも面白いネタを生み出さねばといったプレッシャーが大きいのではと推察する。

私はブログが好きなので、芸能人のブログもよく読む。時折、その中で非常に強い『前向き』な姿勢を感じる記事と出逢う。わかりやすく『前向き』という単語が記事の中に文字として入力されている事もある。過度の『前向き』さが、彼らを自死に向かわせる事だけは無きよう、願わずにはいられない。

生きていれば良い事があると迄は言わないが、どんな人にも生まれて来た意味や役割がきっとある。この事だけは信じていたい。

生きている間に、自分には役割が無いと自己完結して自死を選ぶ人が後を絶たない。

人生は、選択の繰り返しにより設計されてゆく。寿命という枠を人工的に取り払い、敢えて自らの選択により、早めに人生というゲームから退散するか否かも、悲しいかな、一つの選択だ。

だから、自死が無くなる日は残念ながら、やって来ないかもしれない。一方で、後世の人々が、不遇の死を遂げた誰かから恩恵を受け救われる、或いは、生前の言動に感銘を受け鼓舞される場合がある事も、これまた紛れもない事実だ。

苦しい時代だからこそ、古い慣習や思い込みのみに囚われず、視野を広げ、目の前の見知った人に留まらず、横や後ろにいる見知らぬ人々や事柄にも興味関心を持ち、この窮地を乗り越えていけたらと思う。

以　上